

平成二十九年（二〇一七）三月二十五日発行
『大倉山論集』 第六十三輯 抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

（第三十四回研究所資料展）

大倉山記念館のデザインと設計者長野宇平治展

林 宏美

大倉山記念館のデザインと設計者長野宇平治展

林 宏 美

旧大倉精神文化研究所本館である横浜市大倉山記念館の建築は、昭和七年（一九三二年）に竣工し、平成二十八年（二〇一六年）で創建八十四年を迎えた。建物の施主は研究所創立者の大倉邦彦、設計は長野宇平治の手に拠るものである。その建築は、設計者自身が「プレ・ヘレニック様式」と名づけた古代ギリシヤ以前の建築様式によって特徴づけられている。その外観から「白亜の殿堂」「ギリシヤ神殿」などと形容されることも多い。

しかし、昭和三十年代から四十年代頃には、研究所の財政的困窮のために建物の補修が叶わず、その荒廃ぶりから「化け物屋敷」と評される有り様であった。今でも古くからの地域住民には、その当時の印象がかなり根深いようである。

研究所は財政面の危機的状况を脱し得ず、昭和五十六年（一九八一年）に横浜市へ敷地を売却し、同時に建物は市へ寄贈した。その後、横浜市によって建物の改修がなされ、昭和五十九年（一九八四年）に横浜市大倉山記念館と名

づけられて開館し、横浜市の市民利用施設となり現在に至っている。

この大倉山記念館の建物は、平成三年（一九九一年）に近代建築としての価値が認められ、横浜市指定有形文化財に指定された。そして今年、平成二十八年十一月一日で文化財指定から満二十五年を迎えた。

そこで当研究所では、これを記念して建物の特徴や文化的価値を知って頂くために、平成二十八年十一月一日から翌二月二十八日までの間、資料展「大倉山記念館のデザインと設計者長野宇平治展」を開催した。開場日数は八十日、期間中の入場者数は延べ三、三二三人であった。本稿は、その展示報告である。

以下、資料展で展示した解説パネル・資料キャプションの内容を順次紹介していく。

【付記】解説および資料キャプションのうち、2・8～10・13は古畑侑亮氏、12は平井誠二氏が執筆した。また、1及び3～5の解説は、第十四回研究所資料展「大倉山記念館の建設―施主大倉邦彦と建築家長野宇平治―」において、平尾直樹氏が執筆した解説文を一部使用している。

なお、本報告の作成にあたり、これらの内容に加筆訂正を行った。

「あいさつ」

横浜市大倉山記念館の建物は、大倉精神文化研究所本館として建設され、昭和七年（一九三二年）に竣工しま

長野は、建物全体を古代ギリシヤ以前のプレ・ヘレニック様式で統一し、部分的には東洋の意匠も用いて、東西文化の融合を表現した独特の様式美を持つ建物を生み出しました。

した。施主は研究所創立者の大倉邦彦、設計者は長野宇平治です。

研究所は昭和五十六年（一九八一年）に建物を横浜市へ寄贈しました。その後、建物は改修を経て、昭和五十

九年（一九八四年）に横浜市大倉山記念館としてオープンしました。今では文化活動の拠点として、また港北区のシンボルとして、地域の方々に親しまれています。

大倉山記念館の建物は、建設当時の姿をほぼそのまま保っています。またプレ・ヘレニック様式を採用した近代建物は、他に例がなく、建築史上においても非常に貴重なものとなっています。平成三年（一九九一年）十一月一日には、その価値が認められ、横浜市指定有形文化財に指定されました。今年には文化財指定から二十五周年の節目の年でもあります。

そこで当研究所ではこれを記念して、設計者長野宇平治の来歴や大倉山記念館の歴史、建物のデザインの特徴などを紹介する展示会を企画いたしました。

本展示を通して、大倉山記念館に対するみなさまの関心と愛着が深まり、大倉邦彦とその意を受けてこの建物を設計した長野宇平治、二人の熱い想いに少しでも心を寄せて頂けましたら幸いです。

◆会場…大倉精神文化研究所附属図書館第一閲覧室・公開書庫

◆会期…平成二十八年十一月一日（火）～二十九年二月二十八日（火）

※十一月三日（木）、六日（日）、二月十二日（日）、十九日（日）を除き、日曜・月曜・祝日はお休みです。

◆開場時間…午前九時三十分～午後四時三十分

◆問合せ先…大倉精神文化研究所

TEL 045(834)6637

◆主催…公益財団法人大倉精神文化研究所

1 設計者長野宇平治（一八六七～一九三七年）

慶応三年（一八六七年）、越後国（現、新潟県）高田に生まれました。明治十七年（一八八四年）に上京。第一高等中学校予科（同級には夏目漱石や正岡子規ら）がいた）から、帝国大学工科大学造家学科入学、明治二十六年（一八九三年）卒業。卒業後は横浜税関嘱託、奈良県

嘱託として勤務します。明治三十年（一八九七年）、大學時代の師である辰野金吾と呼ばれ、日本銀行技師となりました。大正二年（一九一三年）に長野建築事務所を開設し、古典主義建築家の第一人者として、数多くの銀行建築を生み出しました。

大正六年（一九一七年）には、日本建築士会を創設、初代会長に就任します。建築士法の制定にも尽力し、近代建築の礎を築くうえでも重要な役割を担いました。

建築家として活躍する一方で、日本最初のロータリークラブである東京ロータリークラブ創立時の会員に名を連ねるなど、社会奉仕にも関心を示しました。また、歌人佐佐木信綱の指導の下、和歌を詠むなど、その活躍の場は多岐に亘っています。昭和十二年（一九三七年）、死去（享年七十一）。

肖像画は、長野宇平治の写真を基に、洋画家石井柏亭いしいはくていが描いたものです。

石井柏亭（一八八二〜一九五八年）は、写実的で平明

穏和な作風で知られる洋画家です。日本水彩画会、二科展、一水会の結成などにも係わり、帝国芸術院会員、日展運営会理事などを歴任しました。

大倉山で撮影された長野宇平治と家族の写真

フェルナンデス家所蔵（複製）

2 長野宇平治が設計した建物

長野宇平治は、大倉山記念館の他にも多くの建築物を設計しました。

とりわけ、明治三十年（一八九七年）に日本銀行技師となったことから、工事顧問の辰野金吾のもと、京都・小樽・岡山など各支店の設計を手がけています。

ここでは、日本銀行の支店を中心に、長野の手になる建物を紹介します。

旧日本銀行京都支店

（現、京都文化博物館別館）

京都府京都市中京区三条高倉

明治三十九年（一九〇六年）竣工

煉瓦造二階建、一部地下一階

国指定重要文化財

（辰野金吾との共同設計）

旧日本銀行小樽支店

（現、日本銀行旧小樽支店金融資料館）

北海道小樽市色内一丁目十一番十六号

明治四十五年（一九二二年）竣工

煉瓦造二階建、一部地下一階

小樽市指定有形文化財

（辰野金吾、岡田信一郎との共同設計）

旧北海道銀行本店

（現、小樽バイン&北海道中央バス本社ビル）

北海道小樽市色内一丁目八番六号

明治四十五年（一九二二年）竣工

石造二階建

小樽市指定歴史的建造物

旧日本銀行岡山支店

（現、ルネスホール）

岡山県岡山市北区内山下一丁目六番二十号

大正十一年（一九二二年）竣工

煉瓦造及び石造二階建

国登録有形文化財

旧六十八銀行奈良支店

（現、南都銀行本店）

奈良県奈良市橋本町十六番地

大正十五年（一九二六年）竣工

鉄筋コンクリート造三階建（一部四階建）、地下一階

国登録有形文化財

3 長野宇平治の短歌

長野宇平治は、歌人佐佐木信綱の指導の下、短歌を詠んでいました。佐佐木が主宰する竹柏会発行の短歌雑誌『心の花』には、長野の歌が何首か掲載されています。

資料は、『心の花』に掲載された長野の短歌を編んだものです。なお、傍線部「アテネより伊勢にと至る道にして神々に出あひ我名なのりぬ」は、昭和十年（一九三五年）十二月発行の『心の花』第三十九巻第十二号に掲載された短歌で、大倉精神文化研究所本館設計デザインの理念を歌ったものとして知られています。

4 長野宇平治の同級生

長野宇平治の第一高等中学校予科時代の同級には、正岡子規（常規）や夏目漱石（塩原金之助）がいました。資料は、昭和七年（一九三二年）十月発行の『心の花』第三十六巻第十号に掲載された長野の談話筆記です。若かりし日の子規・漱石の知られざる逸話や、長野の学生

時代を垣間見ることが出来る興味深い資料です。

5 長野宇平治のスケッチ

長野宇平治は、フィールドノートを持ち歩き、各地で写生をしていました。建物以外に静物画や風景画の水彩も数多く残っています。

長野宇平治のフィールドノート

フェルナンデス家所蔵（複製）

SEISHIN・BUNKWA・NO・DENDO

（精神文化の殿堂）

昭和三年（一九二八年）八月十四日

沿革史資料No.11039（複製）

設計を始めて間もない時期の大倉精神文化研究所のスケッチです。完成した建物とは形が異なっており、プレ・ヘレニック様式も採用されていません。

6 施主大倉邦彦（一八八二～一九七一年）

明治十五年（一八八二年）、佐賀県神埼郡（現、神崎市）の素封家江原家に生まれました。上海の東亜同文書院を明治三十九年（一九〇六年）に卒業し、同年、大倉洋紙店に入社。明治四十五年（一九一二年）には、社長の大倉文二に見込まれて養子となり、文二の死後は社長に就任します。

大倉は、社長として事業を大きく発展させますが、真の経済活動とは単なる利益追求ではなく、個人の成長の上に会社の発展があり、国家の繁栄があると考えていました。この観点から、教育事業にも携わり、東京目黒の富士見幼稚園や佐賀県西郷村の農村工芸学院などを開設します。また、この考え方をより深め、さらに世の中に広く普及するため、昭和七年（一九三二年）に大倉精神文化研究所を設立しました。

旧大倉精神文化研究所本館である大倉山記念館の設計は長野宇平治の手に抛りますが、記念館の建物は長野の

他作品に比して、その特異性が指摘されます。これは建物の設計において、施主大倉邦彦の意向が大きく反映されていることがその一因と考えられます。

富士見幼稚園

大正十三年（一九二四年）

沿革史資料Z06873（複製）

昭和七年（一九三二年）の研究所設立に先立つ大正十三年（一九二四年）、大倉邦彦は自宅に程近い東京目黒に富士見幼稚園を開園しました。大倉は会社経営で多忙な日々の合間を縫って、園児たちの教育にあたりました。

大倉は、人々が生活に追われ、不安に満ちた社会の中で、大倉洋紙店での社員教育、富士見幼稚園で幼児教育などに携わるうちに、教育の重要性を一層痛感し、教育事業に対する思いを強めていきました。

精神文化図書館設立内容

大正十四年（一九二五年）

沿革史資料No.821841（複製）

大倉邦彦は当初、精神文化の図書館をつくり、その中に研究所を置くことを考えていました。この資料は図書館設立の目的や実施事業について記した最初期のものです。

なお、図書館の構想は、その後に行われたヨーロッパ視察旅行を経て、研究所設立の構想へと変わっていきま

日誌

大正十四年（一九二五年）～昭和三年（一九二八年）

沿革史資料No.2195（複製）

昭和三年（一九二八年）五月十四日に大倉邦彦の秘書原田三千夫が記した精神文化図書館要誌には、新しい日本文化の創造と西洋文化の模倣からの脱却に対する強い思いが述べられています。

大倉や原田らのこうした思いを受けて、長野は世界のさまざまな文化・芸術の原点に立ち返り、古典主義建築にこれまで用いられることがなかったブレ・ヘレニック様式を建物に採用したとも推察されています。

7 長野宇平治への設計依頼

大倉邦彦は当初、長野宇平治ではなく別の建築家に研究所本館建物の設計を依頼するつもりでした。しかし研究所の構想が固まっていくうちにその考えが変わり、長野へ設計を依頼することになります。その間の経緯について正確なところはわかりませんが、二人の縁は大倉と長野がともに東京ロータリークラブの会員であったことに始まります。そしてロータリークラブの会合の中で、大倉は長野に研究所の構想を語り、その設計を依頼したと考えられます。また、長野は研究所の設計以前に、大倉が社長を務めていた大倉洋紙店本店の設計を行っています。研究所の設計を依頼するうえで、この時に築かれた信頼関係やその仕事振りも決め手の一つになったも

のと思われます。

渡欧記念アルバム

沿革史資料No.6688（複製）

大倉邦彦は研究所設立にあたり、大正十五年（一九二六年）三月から昭和二年（一九二七年）一月まで、ヨーロッパへ視察に行きました。大倉は秘書原田三千夫とともに各国の宗教施設・教育施設・図書館の他、名所旧跡や古建築なども精力的に見学しています。このヨーロッパ視察によって大倉は研究所の構想を固めていきました。渡欧中の写真を収めたアルバム四冊、視察旅行中に購入した絵はがき約七六〇点、訪問した施設のパンフレット類などは、現在も研究所で保存しています。

広瀬恭

大倉邦彦は当初、広瀬恭やすしという人物に研究所の設計を依頼していました。広瀬は早稲田大学建築学科出身の建築家で当時は酒井コンクリート工業店に勤務し、大倉が

郷里佐賀に設立した農村工芸学院の設計などを行っています。

大倉は訪欧中にも広瀬を呼び寄せ、研究所の建築について検討を行います。しかしその後、設計者は広瀬から長野宇平治へと変わりました。

『アビ・ヴァールブルク記憶の迷宮』

附属図書館蔵書 2893ウ

本書は、ドイツの美術史研究者アビ・ヴァールブルクについて書いたものです。二四三～二四七頁には、ヴァールブルク文化科学図書館の一九二六年十月四日の図書館日誌の記述から、その日の大倉・原田・広瀬の来館について書かれています。

大倉邦彦の手紙

沿革史資料No.8240-54（複製）

大倉邦彦は秘書原田三千夫よりも先にヨーロッパから帰国しました。これは大倉が滞欧中の原田に宛てて書い

た手紙です。手紙を見ると大倉は酒井コンクリート工業店や広瀬へ設計を依頼することに物足りなさを感じていることがわかります。大倉が欧州各国を視察する中で、さまざまな歴史的建築に触れたことが、大倉の考えに影響を与えたものと推察されます。

ロータリークラブでの集合写真

沿革史資料No.824（複製）

写真の左、アルバム台紙に書かれた「ロータリークラブ」というメモからロータリークラブメンバーの写真であると推察され、大倉邦彦と長野宇平治の姿も確認できます。最前列左から三番目が渋沢栄一であることから、渋沢が亡くなる昭和六年（一九三一年）十一月以前の撮影と考えられます。

大倉洋紙店

左…沿革史資料No.6809（複製）

右…沿革史資料No.6878（複製）

昭和四年（一九二九年）十一月、日本橋区西河岸（現、中央区）に竣工した大倉洋紙店本店の写真です。関東大震災による旧店舗の倒壊を受けて建て替えたもので、設計者は長野宇平治です。

建物は西河岸の代名詞として親しまれるランドマーク的な存在でしたが、現在は建て替えられています。

8 「プレ・ヘレニック様式」とは？

大倉山記念館の建築様式は、長野宇平治によって「プレ・ヘレニック様式」（ギリシア以前の建築様式）と名付けられました。具体的には、今から三千年から四千年前のギリシア青銅器時代に栄えたクレタ文明・ミケーネ文明の建築意匠が参照され、新たな歴史主義建築として創出されています。

十九世紀の西欧における新古典主義建築では、古代ローマ時代の様式が基本とされ、ギリシア時代以前に遡ることはありませんでした。ところが長野は、西洋の建築書や発掘報告書の蒐集・研究により、二十世紀の日本

においてその再生に成功したのです。大倉山記念館は、世界で唯一の「プレ・ヘレニック様式」による近代建築ということになります。

「プレ・ヘレニック様式」の特徴

〈クレタ・ミケーネ双方に見られる建築意匠〉

①上部が太く下部が細くなる裾細りの円柱すそほそ

ミケーネの「ライオン門」浮彫

〈クレタ起源の建築意匠〉

②トリグリフと半ロゼット

ミケーネの「アトレウスの宝庫」の水平部材断片

③円盤列

ミケーネの「アトレウスの宝庫」入口両脇の円柱の浮彫部分

彫部分

④連続螺旋文様

ミケーネの「アトレウスの宝庫」正面

〈ミケーネ起源の建築意匠〉

⑤三角型空間

ミケーネのトロス墓入口

⑥ロゼット

ミケーネの「アトレウスの宝庫」正面復元図（シビエ案）

⑦山形・螺旋両文様の構成装飾

⑧三連出入り口

なお、現代のギリシア考古学の研究水準を踏まえると、「プレ・ヘレニック様式」の称は大雑把なものであり、「クレタ・ミケーネ様式」の呼称がふさわしいとの見解も出されています（勝又俊雄「大倉精神文化研究所の建築の研究」『大倉山論集』第四十七輯、二〇〇一年）。

9 家具・調度品の設計

記念館の建物の設計・工事と並行して、室内で使う家具や調度品もプレ・ヘレニック様式に合わせて特注で設計・製作されました。

八十年以上経った現在でも、その多くが館内に残されており、現役で使われているものも少なくありません。

家具類は、横浜市の文化財には指定されていませんが、文化財になっている記念館の建物と同様に、大切にしています。

壹階 主任応接室用家具設計（小椅子・傘立・丸卓子）

沿革史資料No.3575-1（複製）

地階 食堂家具設計第二案

（小椅子・食卓子・サイドボード・花台）

沿革史資料No.3575-3-1（複製）

曲折椅子変更図

昭和五年（一九三〇年）頃

沿革史資料No.60235（複製）

心の間（現、エントランスホール）の四隅などに配置される曲折椅子です。実際に製作された椅子は、さらにデザインが変更されています。

目録カード室（現、ロビー）

沿革史資料No.11616（複製）

現在のロビーは、かつて研究所附属図書館の目録カード室でした。写真は昭和五十七年（一九八二年）頃に撮影したものです。

部屋の中央あたりに傘立が置かれており、図面「壹階主任応接室用家具設計」に描かれた傘立と見比べると、上部はほぼ図面どおりに作られていることがわかります。

花台

家具は使用する部屋に合わせて作られました。花台については、少なくとも応接室（現、第五集會室）・所長室（現、第六集會室）・談話室（現、第九集會室）・食堂（現、第十集會室）の四部屋に作られたことが資料からわかっており、現在もデザインの異なる複数の花台が残っています。

10 参考品陳列台

大倉邦彦は、昭和四年（一九二九年）の『私の使命事業』の中で、研究所の事業のひとつに「参考品陳列」を挙げています。「参考品陳列」とは、「日本文化乃至東洋文化に関する参考品を陳列して一般の展覧に供す」としてあります。昭和五年（一九三〇年）には、その目的に沿って参考品陳列台を製作しました。

そのデザインには、裾細りの脚をはじめ「プレ・ヘレニック様式」の意匠を認めることができます。

昭和五年（一九三〇年）、建設工事中であった大倉精神文化研究所敷地内からは、土器などの遺物が多数出土しましたが、その土器もかつては、参考品陳列台に展示されていました。

参考品陳列台は、最近まで展示に使用していましたが、現在は安全対策と破損防止のため、保管しています。

土器の出土と参考品陳列台

沿革史資料No.6761-154（複製）

出土した土器を陳列している昭和十年（一九三五年）頃の写真です。当時、参考品陳列台は、応接室（現、第五集会室）に設置されていました。

出土物は、主に弥生時代中期後半から後期にかけてのもので、一部の資料は、現在でも関東地方の弥生時代土器を研究する上で重要なものとして注目されています。

詳しく知りたい方は、大倉精神文化研究所・横浜市歴史博物館編『大倉精神文化研究所内遺跡出土資料報告書』（公益財団法人大倉精神文化研究所、二〇一二年）をご覧ください。

参考品陳列台設計図

沿革史資料No.60232（複製）

参考品陳列台は、セレバス工業に発注して作製されました。研究所には、昭和五年（一九三〇年）当時の設計図が残っており、実物と比較すると両者はほぼ一致して

います。

11 大倉山記念館は人間だ

大倉邦彦は、精神文化研究所で人間を育てることによって、よりよい社会をつくりたいと考えていました。

大倉邦彦が育てようとした人間、それは「心」と「知性」の両方を兼ね備えた人間でした。そこで建物の中央を「心」に、東西の部分は「知性」に見立て、その両方を合わせることによって「人間」を表現し、自身の研究所への思いを形にしました。

長野宇平治はそのような施主大倉邦彦の意向を取り入れ、建物の設計を行いました。

大倉山記念館は、五つのパーツを組み合わせて作られています。

【心】

- ① 中央館（エントランスホール）：「心の間」
- ② ホール：「殿堂」と呼ばれ、信仰心を養う場所

③ ギャラリー：回廊（坐禅道場）、心を鍛える修行の場

所

【知性】

④ 東館：図書館書庫、知性を養う場所

⑤ 西館：図書閲覧室・研究室などがあり、知性を養う場

所

12 大倉山記念館で街づくり

昭和五十三年（一九七八年）、港北区役所が大倉山に移転しました。駅から区役所へ向かう東口商店街は客足が増え、昭和五十九年（一九八四年）春に、明るく近代的な街、レモンロードへと変身し、同年十月、大倉山記念館がオープンします。

それから二年後の昭和六十一年（一九八六年）、西口商店街は、「レモンロードに追いつけ、追いこせ」を合言葉に、大倉山記念館のデザインをモチーフにした街づくりを始めました。

改装前のエルム通り

昭和四十年（一九六五年）頃撮影

地域資料ファイル（複製）

昭和六十年（一九八五年）五月二十八日撮影

横浜アーリーナ提供（複製）

大倉山駅西口は「さかえ通り」と呼ばれ、歩道も無く、ごく普通の狭い商店街でした。

エルム通りの完成

地域資料ファイル（複製）

昭和六十二年（一九八七年）から始まった工事は、翌年（一九八八年）に完成しました。各店舗は道路から二メートル後退して、統一デザイン（円柱・白い壁・三角飾り等）のビルに建て替えられました。新設された歩道の地下には共同溝が埋設され、電柱が消えて、広い空がもどりました。

調印式とフェスティバル

昭和六十三年（一九八八年）八月一日

沿革史資料No.12457-21（複製）

地域資料ファイル（複製）

「さかえ通り」は「エルム通り」と改称し、アテネのエルム通り商店街と姉妹提携を結びました。

それを記念して、「大倉山エーゲ海フェスティバル88」が、エルム通り・記念館・大綱中学校・港北公会堂などを会場に、大倉山全体で開催されました。

そして未来へ

エルム通りの完成から二十年以上が経過すると、街並の統一感が少しずつ薄れてきました。そこで、商店街では、平成二十四年（二〇一二年）に「大倉山エルム通り街づくり協定」を定めて、永続的な景観の維持と魅力ある街づくりを続けていくことにしました。長野宇平治が考案したプレ・ヘレニックのデザインは、地域と共にこれからも生き続けていくのです。

13 幻の大倉山改造計画

大倉山記念館は、創建当時の状態を保ちつつ、市民利用施設として使用されていますが、実は全く違う施設になる可能性もあったのです。

ここでは、幻となった大倉山の改造計画を紹介します。

大倉山の改造計画①

沿革史資料No.1910-1・1910-2・1910-7・1910-9

(いずれも複製)

大倉山記念館の前庭は現在、大倉山公園となつていますが、住宅地となる可能性もありました。大倉精神文化研究所では、経営が苦しくなつた昭和四十年代に、マンションやテラスハウスを前庭へ建て、収入を補うことを計画していました。

大倉山の改造計画②

沿革史資料No.1923-2・1924-9-11・1924-9-12・

1924-9-13・1924-11-2 (いずれも複製)

昭和五十六年(一九八一年)、大倉精神文化研究所は、建物を横浜市へ寄贈します。その当時、横浜市は前庭に能楽堂を建設し、さらに記念館内には宴会場をつくる計画を立てていました。

14 横浜市指定有形文化財の指定

大倉山記念館の建物は、平成三年(一九九一年)十一月一日に横浜市指定有形文化財(一般建造物)に指定されました。『横浜の文化財第二集』(横浜市指定・登録文化財編、平成四年度)では、古典主義建築の第一人者、長野宇平治晩年の作である大倉山記念館は、長野のこれまでに手がけた作品とは異なり、「正統的な古典建築様式を超えた独特な雰囲気を持つ建築物として、近代建築史上に占める地位は注目すべきものがある」と、建物の持つ歴史的価値について述べています。

横浜市の文化財指定を報じる新聞記事

『産経新聞』平成三年（一九九一年）十月二十五日

『神奈川新聞』平成三年（一九九一年）十月二十六日

指定有形文化財の標柱

平成二十八年（二〇一六年）撮影

記念館坂の頂上、大倉山記念館へと向かう階段の下には、横浜市指定有形文化財を示す標柱が建てられています。標柱は平成四年（一九九二年）三月に設置されました。

横浜市域の指定・登録文化財数

『国・神奈川県および横浜市指定・登録文化財目録』

（平成二十八年「二〇一六年」十一月四日掲載）

平成二十八年（二〇一六年）十一月現在、横浜市内にある文化財は全部で四六〇件（国指定・登録、県指定を含む）、うち港北区内の文化財は十九件となっています。

15 建設関係資料の文化財指定

大倉精神文化研究所では、研究所本館として建てられた大倉山記念館の設計図面や契約書、注文書とその請書、請求書と納品書、工事に關するやりとりをした書簡類、建設中の写真や映像など、建設に關わる資料を全て所蔵しています。戦前の建築は建物そのものは残っていても、建設に關わる資料は失われている場合が多く、大倉山記念館のように建物と資料の両方が残り、その実態を詳細に知ることが出来る例は、稀有なものとなっています。

そうした点を踏まえ、平成十六年（二〇〇四年）十一月五日には、大倉精神文化研究所建設関係資料四五四六点も、横浜市指定有形文化財（歴史資料）に指定されました。

指定書

平成十六年（二〇〇四年）十一月五日

沿革史資料No.10349（複製）

文化財指定の通知と指定調書

平成十六年（二〇〇四年）十一月二十二日

沿革史資料No.10349.2（複製）

指定調書の末尾付近には、大倉精神文化研究所建設関連資料が「わが国近代の建築様式史、建築生産史、建築経済史の上から非常に貴重なものであり、わが国近代建築史上二級の資料とみなされる」と書かれています。

指定文化財の印

研究所では、その設立準備を始めた大正末から現在に至るまでの各種資料、創立者大倉邦彦に関わる資料を、研究所沿革史資料として整理・登録し、保存しています。建設関係資料はこの沿革史資料の一部であり、「指定文化財」であることを示すラベルや押印があります。

16 港北区内の歴史的な建物

横浜には開港以来、国際都市として発展してきた歴史

を示す近代建築、古くからの住民の信仰を現す寺社など、歴史的な建物が多く残されています。それらの建物の中には、大倉山記念館のように文化財に指定されているものと、認定・登録歴史的建造物として保全している建物とがあります。

港北区内には、指定有形文化財に指定されている建物が五件、認定歴史的建造物が三件がありますので、ここではそれらの建物、文化財・歴史的建造物との違いについてご紹介します。

文化財に指定・登録された港北区内の建物

（個人宅等は原則非公開）

・国登録有形文化財 山口家住宅主屋

（篠原台町一丁目二二）

時期…昭和十三年（一九三八年）頃

登録…平成十七年（二〇〇五年）七月十二日

・市指定有形文化財 横浜市大倉山記念館

(大倉山二一〇一)

時期…昭和七年(一九三二年)

指定…平成三年(一九九一年)十一月一日

・市指定有形文化財 西方寺本堂、山門、鐘楼

(新羽町二五八六)

時期…本堂 正徳三年(一七一三年)

山門 弘化年間(一八四四～一八四八年)

鐘楼 幕末頃

指定…平成九年(一九九七年)十一月四日

・市指定有形文化財 飯田家住宅(綱島台一七五)

時期…主屋 明治二十二年(一八八九年)

表門 江戸時代後期

指定…平成六年(一九九四年)十一月一日

港北区内の認定歴史的建造物

・中澤高枝邸(日吉本町一―三)

時期…昭和八年(一九三三年)

認定…平成六年(一九九四年)度

・市指定有形文化財 雲松院本堂及び山門

(小机町一四五二)

時期…本堂 宝暦三年(一七五三年)

山門 安政五年(一八五八年)

指定…平成七年(一九九五年)十一月一日

・慶應義塾大学日吉寄宿舍(箕輪町一―一九)

時期…昭和十二年(一九三七年)

認定…平成二十三年(二〇一一年)十月十四日

・田邊家住宅(日吉の森庭園美術館)

(下田町三―一〇三―四)

時期…主屋 安政七年(一八六〇年)頃

土蔵 昭和十五年(一九四〇年)頃

認定・平成二十八年（二〇一六年）三月二十四日

認定・登録歴史的建造物について

横浜市では歴史的価値が高く、横浜らしい景観を生み出している建築を横浜を特徴づける歴史的資源・街づくりの資源と位置づけ、歴史的建造物として認定・登録を行っています。

文化財に指定された建物は、その内外に関わらず変更には大きな制限があり、その用途の範囲も限られてきませんが、歴史的建造物は、建物外観の保全と景観維持に重点を置き、内部の変更をある程度許容することで、文化財よりも建物活用を自由度を高め、保全に対する負担の軽減を図っています。

ちなみに、文化財の場合は「横浜市文化財保護条例」に基づいて指定・登録を行い、その所管部署は教育委員会事務局生涯学習文化財課です。一方、歴史的建造物は「歴史を生かしたまちづくり要綱」に基づいて認定・登録がなされ、都市整備局都市デザイン室が所管部署と

なっています。

17 実物資料

報酬金支払いに対する礼状

昭和七年（一九三二年）九月十二日

沿革史資料No.61947

長野宇平治から大倉邦彦に宛てた礼状です。

荒木孝平の書簡

沿革史資料No.6030

荒木孝平は、長野の一番弟子ともいえる建築士です。長野宇平治の設計に基づき、工事着工に向けた実施設計を行ったのが荒木です。工事に関わる実務も荒木が主体となつて進めており、研究所建設における中心的役割を担いました。

図書館建築打合せ資料

昭和三年（一九二八年）

沿革史資料No.8218-393

大倉邦彦は当初、精神文化の図書館を設立する予定でしたが、ヨーロッパ視察を経て、その構想は研究所へと発展していきました。研究所の建築工事が始まる昭和四年（一九二九年）以前の資料には「精神文化図書館」や「図書館」の名称が使用されています。本資料は、大倉邦彦と秘書の原田三千夫、長野宇平治とその弟子荒木孝平らによる建築打合せの内容をまとめたものです。

精神文化図書館略設計案

昭和三年（一九二八年）十月頃

沿革史資料No.6035-1-3

本設計案はほぼ現在の建物と同じ様相を呈しています。が、塔頂部や中央館二階部分などに相違があります。

大倉精神文化研究所の石膏模型（縮尺百分の一）

昭和四年（一九二九年）十二月十四日

旧大倉精神文化研究所本館（現、横浜市大倉山記念館）

大倉山記念館のデザインと設計者長野宇平治展（林）

の設計図は長野宇平治らの手により、昭和四年（一九二九年）九月三十日に完成しました。この石膏模型は、その完成した設計図をもとに佐藤彫刻制作所の佐藤八百やおにより四百円で製作され、同年十二月十四日に納品やされました。工事中に設計の一部が変更されたため、実際の建物とはやや異なっています。

この模型は、平成十六年（二〇〇四年）十一月に、設計図などの関連資料と共に横浜市の文化財に指定されました。

18 関連図書

〈研究所沿革史資料〉

・ 神代雄一郎

『近代建築の黎明 明治・大正を建てた人びと』

美術出版社、昭和三十八年（一九六三年）七月十日

沿革史資料No.12334

・ 朝日新聞社横浜支局編『残照 神奈川の近代建築』

有隣堂、昭和五十七年（一九八二年）五月三十日

沿革史資料No.12332

・増田彰久(写真)・塚本邦雄(詩文)・藤森照信(解説)

『建築紅葉青鳥図』

三省堂、昭和五十八年(一九八三年)四月一日

沿革史資料No.12333

・『特別展 明治建築をつくった人々 その二』

博物館明治村、昭和六十一年(一九八六年)四月六日

沿革史資料No.10753

・土崎紀子・沢良子編

『住まい学大系 六五 建築人物群像 追悼編／資料編』

住まいの図書館出版局

平成七年(一九九五年)四月十日

沿革史資料No.12335

・『日本の美術』第四四八号 日本人建築家の軌跡

至文堂、平成十五年(二〇〇三年)九月十五日

沿革史資料No.10754

・安田徹也「大倉精神文化研究所の設計過程」

『建築史学』第五十号、建築史学会

平成二十年(二〇〇八年)三月

沿革史資料No.10755

・横浜都市発展記念館・青木祐介

『開港一五〇周年記念 横浜建築家列伝』

横浜都市発展記念館

平成二十一年(二〇〇九年)年四月二十五日

沿革史資料No.10955

・横浜都市発展記念館

『HAMANEWSLETTER』第十二号

横浜都市発展記念館

平成二十一年(二〇〇九年)年七月一日

沿革史資料No.10956

・安田徹也『大倉精神文化研究所の建築史的研究』

平成二十二年(二〇一〇年)

沿革史資料No.11581

・神奈川県建築士会建築史図説編纂特別委員会編

『図説近代神奈川の建築と都市』

神奈川県建築士会

平成二十五年（二〇一三年）三月一日

沿革史資料No.12244

・『LIXILEY no.7』

LIXILEY、平成二十七年（二〇一五年）二月

沿革史資料No.12375

・小俣一夫

「吹付けの歩んだ道―嚆矢となった先人たちの偉業と

企業の軌跡―」

『日本建築仕上材工業会NSK会報創立五〇周年記念

号』

平成二十七年（二〇一五年）七月三十一日

沿革史資料No.12583

大倉山記念館（旧大倉精神文化研究所本館）の外装には、三色斑入り白セメント吹付という塗装仕上げが施されました。吹付は、昭和五年（一九三〇年）五月三十一日に特許が認可された当時の最新技術であり、大倉山記念館は、日本で初めて吹付塗装が行われた建築です。

〈附属図書館蔵書〉

・『日本の建築 明治・大正・昭和 三 国家のデザイン』

三省堂、昭和五十四年（一九七九年）二月

附属図書館蔵書 52311

・吉田鋼市『Eコマ建築募情』

鹿島出版会、平成三年（一九九一年）五月

附属図書館蔵書 52315

・横浜市歴史的資産調査会・横浜市都市計画局計画部

都市デザイン室編

『都市の記憶 横浜の近代建築（I）』

横浜市歴史的資産調査会、平成三年（一九九一年）

附属図書館蔵書 52316

・横浜シティガイド協会編『ハマの建物探険』

神奈川新聞社、平成十四年（二〇〇二年）六月

附属図書館蔵書 52316

・ギャラリー・間編『建築MAP 横浜・鎌倉』

TOTO出版、平成十四年（二〇〇二年）十月

附属図書館蔵書 52316

・鈴木博之・増田彰久・小澤英明・吉田茂・オフィス
ビル総合研究所

『日本のクラシックホール 都市の記憶Ⅲ』

白揚社、平成十九年（二〇〇七年）六月二十日

附属図書館蔵書 523.1ス

・高井潔（写真）『日本の名景 洋館』

光村推古書院、平成二十一年（二〇〇九年）九月

附属図書館蔵書 523.1タ

・伊藤隆之（撮影）・米山勇（監修）

『日本近代建築大全』

講談社、平成二十七年（二〇一五年）五月二十八日

附属図書館蔵書 523.1イ